いつもきみのそばに・・・3

苺タルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつもきみのそばに・・・３

【Ｎコード】
Ｎ９２３９Ｃ

【作者名】
苺タルト

【あらすじ】
あれから〇年。（何年だぁ？？）舞輝は２７歳、達弥３１歳、愛娘舞弥は６歳になった。舞弥とでかけた先で以前付き合っていた陽子と再会。この再会がまた舞輝と達弥を引き離そうとする。まだ密かに舞輝を想い続けてる聡太が動き出す。

第1話　（前書き）

しつこいほど、苺です。
これで最後だと思うけどぉ！

全部架空のものです。
苺の頭ん中で都合のいいようにストーリーが進んでいます。

第1話

「お別れだね・・・達弥さん。さようなら・・・」
「舞輝？」
「楽しかった、今までありがと。」

どうなってるんだ？

舞輝（マキ）と舞弥（マヤ）がどんどん遠くなっていく。

「待ってよ！どこ行くんだよー！」

叫んでも二人には届いていないようだ。

「待ってっ！」

バァッと飛び起きた。

なんだ、夢か・・・

ものすごい汗をかいていた。

「大丈夫？」

目をこすりながら舞輝が起きた。

「あぁ。大丈夫。」
「なんか叫んでたけど。」

「夢見てたんだ。恐ろしい夢。」
「お漏らししてない？」
「するか。」
「正夢じゃないといいね。」

人事だと思って言いたい放題。
正夢だったらシャレにならない。

「シャワー浴びてくるよ。」
「うん。」

舞輝はパタンと横になって瞬時に眠りについた。
シャワーを浴びて戻ると、舞弥が目をこすって寝室の前で枕持って立っていた。

「舞弥、どうした？」
「おきちゃったから一緒に寝てもいい？」

あの時3歳だった舞弥は今6歳。
舞弥にひとつ部屋を用意して、来年の小学校入学の準備。
一人で寝る習慣をつけていた。

「よしおいで。」

重たくなった舞弥を抱き上げ、寝室に行った。

「ねぇパパ。」
「ん？」
「なんで舞弥には妹とか弟がいないの？」
「う～ん・・・」

「幼稚園ではね、お友達みんないるんだよ。あとね、奈美ちゃんのママお腹大きいんだよ。」
「舞弥にも欲しいのか？」
「うん。」
「そっかぁ。ママはダンスが好きだからなぁ。」
「舞弥もダンス好き。あとね、ママのダンスも好き。」
「ママと神様にお話しとくよ。もう、寝なさい。」
「うん。おやすみなさい。」

達弥はトントンしながら、もう夢のことなど忘れて眠りにつくのだった。

舞輝とは何度も話し合った。
でも、舞輝は今一番いいときであるのも間違いなかった。
それを辞めさせようとも思ってもいない。
今舞輝はトップダンサーに上り詰めていた。

舞弥に兄弟を作ってあげたい。
舞輝も達弥も願っていることだ。
でも、二人育てながら、舞台に出ることは難しい・・・
周りの協力にも限界があったからだ。
地方にいけば1ヶ月帰れない。
舞弥にも辛い思いをさせてきた。
それぞれの両親にも。
もうひとりとなったらもう、若くない両親にはキツイ。

まだ若い二人の夜は減ってはいない。
けど、月からの使者が毎月重いうえ、舞台人。
大事な舞台で妊娠発覚や生理痛で動けなくなるのを防ぐためピルを

飲んで体の調整をしている。

何度話し合っても結果は同じだった。

朝、舞輝が作る味噌汁のにおいで起きた。

「おはよ」

「おはよ。もう起きて平気なの？」

「うん。」

「じゃぁ、舞弥も起こしてきて。」

「わかった。」

２７歳になった舞輝は、達弥が買ったマンションのシステムキッチンで朝ご飯を作っていた。

知っての通り、舞輝は”痩せの大食い”

朝からご飯１キロ、卵１０個分の巨大卵焼き、ウィンナー１０本はたべる。

しかも・・・うまそうかつ幸せそうに・・・

達弥が惚れたとこはそこだった。

おいしものを幸せそうに食べる。

「ママおはよ。」

「おはよー舞弥。ご飯だから顔洗っておいで。」

すっかりママである。

１５のときに、前の彼の子供を流産してしまっているため、舞弥はかけがえのない宝。

「次の作品決まったの。」
舞輝は達弥と舞弥のよそったご飯をテーブルに持ってきた。
「ホント！また翔くんたちと？」
「そう。またお姫様。やんなっちゃう。」
「俺は好きだけど。」
「あたしのキャラじゃない。」
「名コンビから名トリオだもんな。３人のアドリブには毎回笑わされるよ。」

舞輝が所属する東京ミュージカルカンパニー（ＴＭＣ）に、翔（カケル）と聡（ソウタ）という仲間がいる。
同期で同い年の３人は研究生時代からつるんでいた。
舞輝にとって、素でいられる大事な存在。
達弥と喧嘩したりなんかあると、必ず二人といる。
二人は舞輝が言い出すまで、何があったか聞くことはない。
達弥も、二人といるのがわかっているから心配もしてない。
達弥が迎えに行けば仲直り。
「ホント？役に入りつつも、やってることは結構素だったり。」
舞輝は自分の巨大朝ご飯をトレーに乗せて持ってきた。
「ママすごーい！」
「では、いただきます！」
「いつから稽古に入る？」
「２週間後！」
「そっか、スタジオのタイムスケジュール組みなおさないとな。」

「そだね。」

二人は、舞弥が生まれてからダンススクールを開設した。
キッズを中心に始めたが、今は大人のバレエや、ヨガなどもやっている。
達弥は、元ｓ－ｗｉｎｇのダンサー。
ＨＩＰ－ＨＯＰやハウスなどを教えている。
メンバーだった拓（タク）も、ブレイクダンスを教えにきてくれている。

ちなみにヨガのインストラクターは、舞輝の親友、愛海（アミ）。
人妻女子大生で、舞踊専攻を出たのち、ヨガのインストラクターの資格を取って今に至る。
子育てしながらできる！と言って。
愛海は2児のママ。子供たちが幼稚園に行ってる間の時間にここで教えている。
同じ子供を持つママさんたちがダイエットのためにきている。

「おはようございまーす！！」

愛海が元気にスタジオに来た。

「おはよう、今日もよろしくね！」
「こちらこそ！今日舞弥ちゃんは？」
「達弥さんが遊びに連れてってる。」
「そっか。誰かがここ見てないといけないもんね。」
「うん。でも、3人ででかける日はきちんと作っているから。」
「うちも、今日は廉くんがみてくれてるの。」
「そう！意外に子煩悩だもんね。」
「助かってる。」
「今日はアタシの受けようかと思うの、お手柔らかに。」

「手加減いたしません。」

愛海は中学のときからの親友。
自分のことより舞輝のことばっか心配して舞輝を励ましてきた。

「はい、はじめまーす！今日は受付嬢の方が参加してくれました。
この方は体柔らかいですよー！皆さんも頑張りましょう！」

１時間愛海のヨガを受け、次の時間は舞輝のＯＬのためのバレエ入門。そしてＯＬのためのＪＡＺＺ入門クラス。
土日しか休みのない働く人のも踊ってもらいたくて開設した。
夕方から、達弥とバトンタッチしてＨＩＰ－ＨＯＰとＨＩＰ－ＨＯＰＪＡＺＺのクラス。
ほぼ若い子で満員になる。

達弥は、舞弥を連れて映画館に来ていた。
６歳のくせにイケメン好き。
イケメン俳優が出てる映画を見たい！と舞弥が言って来たのである。

まったく先が思いやられる・・・

舞弥はしっかりポップコーンとジュースを持って席に着く。

「そんなに食べてお昼ご飯たべれるのか？」
「大丈夫。」
「ホント、ママにそっくりだな。」

イケメンを堪能して映画館を出ると、

「パパトイレ！」
達弥は館内にあるトイレに連れてった。
「ここで待ってるからな。」
「うん。」
舞弥は走ってトイレに行った。
混んでいるのか、なかなか戻ってこない。
ちょっと心配になってきたとき、
「達弥？」
女の声で自分の名前を呼ばれ振り返った。
「・・・陽子？」
達弥が以前付き合っていた陽子が立っていた。
「久しぶり。元気してた？」
「あぁ、そっちこそ。」
「変わらないわね、デビューしたときの達弥のまんま。」
「そうか？随分おっさんになったよ。」
「パパ？」
気づいたら舞弥がトイレから戻ってきた。
「おぉ、混んでたのか？」
「うん。」

「達弥の子？」
「そうだよ。」
「随分大きい子いるのね。」
「２５のときの子だ。」
「そう・・・羨ましいわ。」
「結婚は？」

陽子は首を振った。

「そっか。」
「奥さんは？」
「スタジオ見てる。休日は交代で子供見てるんだ。俺もそろそろ帰らないと、教えあるから。」
「相変わらず、踊ってるのね。」
「もちろん。じゃぁな。」
「ねぇ、今度・・・聞いてもらいたいことあるの。誰に相談したらいいかわからなくて。ここで１３年ぶりに会えたのもなんかの縁かなって。」
「いいよ。これ連絡先。」

達弥は名刺を渡した。

「ありがとう。」
「じゃぁな。」

なにやってんだ・・・・俺。
舞輝が知ったらなんていうかな。

「パパ、誰？お友達？」

「そうだよ、パパが高校生のときのお友達。」
「ふーん」
「ご飯たべるか！」
「うん！」

「はい、今日はここまでにします。あぁ、新作の出演がきまりまして、2週間後からお稽古に入ります。スケジュールの変更があると思うのでチェックこまめにしてくださいね！」
「ありがとうございました。」
「ママァ～！！」

舞弥が手にいっぱいの袋をぶら下げて舞輝に駆け寄ってきた。

「おかえりぃ～！何買ってもらったの？」
「内緒！」
「えぇ～。すぐバレるんだからさぁ。」
「お家帰ったらねぇ。」
「お疲れ！」
「達弥さん、舞弥ありがとね。」
「舞弥姫にはかなわないよ。」
「甘いんだから。」
「そうだ、夜話しあるんだ、起きて待っててくれないか？」
「？わかった。」
「きっと舞弥の妹か弟のお話だよ！」
「は？」

舞輝は達弥を見た。

「まぁ、ともかく夜に、シャワー浴びてこいよ。」

「うん。」

なんだろ？

急に欲しくなっちゃったのかな？

シャワーを浴びて、着替えて戻ると、舞弥が達弥と踊っていた。

舞弥はＪＡＺＺよりＨＩＰ－ＨＯＰのほうがずば抜けて飲み込みが早かった。

やっぱ達弥さんの子だ。

「おまたせ。」

「ママきたぞ。今日も早く寝るんだぞ！」

「うん。パパ今日はありがとう！」

「おやすみ。」

「じゃぁ、先帰るね。ご飯食べないで待ってる。」

「わかった。じゃぁ、いつもより倍踊って腹減らして帰るよ。」

「うん。」

舞輝は、いつの間にか取った免許で舞弥を車に乗せ、近くのスーパーに買い物に寄った。

「何たべよっかぁ。」

「う～ん。白いスパゲティ」

カルボナーラのことである。

「カルボナーラかぁ。」

「うん、カルおなーら」

「それ臭そうなスパゲティだねぇ。」
「おいしいよ！」
「じゃ、そうしよっか！パパも好きだし。」

食材を買って帰宅。
舞弥をお風呂に入れて、部屋の掃除、洗濯。
舞弥の分の夕飯だけ作って食べさせて、寝かす。
回し終わった洗濯物を干して修了。

あとは達弥さんの帰りを待つだけ。
本を読んで待つことにした。

戸締りを確認して、スタジオの出入り口の鍵を閉めた。
車に乗り込むと、ケータイが鳴っているのに気づいた。

舞輝かな？

見ると、知らない番号。

「もしもし？」
「もしもし・・達弥？」
「陽子か？」
「えぇ。早速かけちゃった。家？」
「いや、今から帰るところ。」
「そう。今から会うなんて無理よね？」
「ごめん、舞輝が待ってるから。」
「奥さん？」
「そう。明日もスタジオ開けなくちゃいけないからさ。」

「わかったわ。ごめんなさい・・・こんな時間に。」
「いや。レッスンない日にしよう。連絡するよ。」
「わかった。おやすみ。」
「おやすみ。」

陽子とは舞輝と出会う前に付き合っていた。
高校1年から付き合いだして、3年の卒業式の日にふられた。
達弥がマジに惚れていた女だった。
ｓ－ｗｉｎｇとしてデビューが決まっていたから、なかなか会えなくなっていたのも事実で、ほったらかされたことが彼女には耐えられなかった。
達弥が忙しくしている間に好きな男ができてしまってそっちに乗り換えたかったのがホントのところ。
達弥は何も知らないまま、未練を残し別れることにＯＫした。
舞輝に出会う3年間、人を好きになることができなかった。
嫌いで別れたわけじゃない、憎んでもいない。
だから、陽子をほっとけなかった。

舞輝が待っている、早く帰らなければ。
達弥は車を発進させた。

「ただいま。」

舞輝の返事はなく、家は静かだった。

「舞輝？」

ダイニングに行くと、舞輝はテーブルにふせっていた。
達弥は寝室から毛布を持ってきてかけると、舞輝が目を開けた。

「達弥さん？」
「起こした？ごめん遅くなって。」
「ううん。」
「舞弥は？」
「ちゃんと寝た。すぐ作るね。」
「あぁ。」
「洗濯物、ちゃんと洗濯機に入れておいてね。」
「わかったよ。」

達弥はレッスン着と下着を洗濯機に入れに風呂場に行った。
寝室に行って部屋着に着替えダイニングに行くと、舞輝が慣れた手つきで料理している。

「いい匂い。何作ってんの？」
「舞弥のリクエスト、カルおなーら。」
「カルおなーら？カルボナーラか？」
「そう！笑えるでしょ？」

楽しそうにフライパンを振る。

「お皿出すよ。」
「うん。お願い。」

達弥は家庭的で家事に協力的。こうして二人でキッチンに立つこともしばしば。

「そんで、話しって？」
「あぁ、実はさ・・・」

今日あった出来事を話した。

「じゃぁ、１３年ぶりに再会した縁で相談に乗ってもらいたいと。」
「あぁ。言わないでまた騒ぎになる前に、話しときたくて。」

過去に2度ほど、達弥の優しさが裏目に出て、熱愛報道されたことがあった。

「達弥さん、ほっとけないんでしょ？」
「え、あぁ。舞輝に出会うまでずっと後悔してたんだ。かまってやれなかったこと。なんかほっとくわけにはいかなくて。」
「そか。」
「舞輝・・・変なこと言ってごめん。それっきりだと思うから。」
「信じてるから平気。達弥さんが優しいのも知ってるし。力になってあげたら？」
「ありがと。」
「食べよ！」

二人は盛られた”カルおなーら”をテーブルに運んで食べ始めた。

「うまい！」
「ほんと？よかった。」
「明日、レッスン行く日だよな？」
「うん、そうだよ。」
「じゃぁ、幼稚園には俺が送ってく。」
「あろがと。」
「きつくないか？昼間は自分のレッスン、夜は教えじゃ。」
「大丈夫。好きだから教えるのも。」
「そっか。あっ、翔くんたちに教えのこと頼んでみてくれ。」
「ＯＫ。」

「あとさ・・・そろそろ・・・」
「ん？」
「そろそろ・・・」

まさか・・・舞弥が言ってた、二人目？？？？？

「な、何がそろそろ？」
「うん、発表会やらないか？だいぶ生徒も増えたし、乗ってきてると思うんだ。」
「あぁ！発表会！なんだ。」
「え？」
「ほら、舞弥が弟だ妹だ言ってたから。」
「あぁ。明け方に一回起きた時、舞弥も起きてさ。一緒に寝ようっていうからベッドに入れてやったらなんで舞弥には弟とか妹がいないの？って。」
「そうだったの。」
「だれだれちゃんのママはお腹大きいんだよって。」
「そっか・・・」

わかっちゃいるんだけどなぁ・・・・二人目。

「焦る必要はないよ。」
「達弥さん。」
「舞弥だってママのダンス好きだって言ってたよ。」
「欲しくないわけじゃないんだよ？」
「わかってる。さぁ、寝よう！ご馳走様！片付けとくから先布団に入ってろよ。」
「うん、じゃぁお言葉に甘えて。」

突然再会した元カノの陽子。

なんかの縁だから相談に乗ってもらいたいなんて・・・多分嘘。
達弥さんに再会して、また恋の火種が発火したんだ。
なんで力になってあげなよなんて言ったんだろ。
凄い好きだった人って聞いてる。
余裕こいてる場合じゃないような・・・・なんかあるような気がする。
この胸騒ぎ・・・やな予感。

第2話

翌日。

いつもどおりにみんなで朝ごはんを食べると、舞輝は大きなスポーツバッグを持って家を出た。

「舞弥のお迎え行ってからスタジオ行く。」

「わかった。こっちの心配はいらないからおもいっきり踊ってこいよ。」

「ありがと。舞弥後でね！」

「ママいってらっしゃーい！」

車を発進させると、舞弥が大きく手を振ってお見送りしてくれた。

都内にあるアカデミー生が日々レッスンに励むスタジオで、舞輝たちも舞台のないときはレッスンに通う。

徒歩1分の寮に行けば、食堂でおいしいご飯にもありつけられる。

レッスン着に着替えてスタジオに行くと、

「舞輝！」

翔が手を振った。

「おはよ！」

舞輝は他の団員に挨拶しながら真っ直ぐ翔と聡太のとこへ行った。

「今日も教えあんのか？」

「うん。夕方から。」
「あっちもこっちも大変だな。」
聡太は腹筋をしている。
「まぁね。楽しいよ、教えるのも。」
荷物を置くと、早速開脚してストレッチを始めた。
「ねぇ、お昼ごはん食堂行く？」
「あたぼう。」
「二人に聞いてもらいたいことあんの。」
「マジ？なんかあった？」
「まぁね。」

二人は顔を見合わせた。
舞輝から相談したいことがあると言ってくるのは珍しい。
なんかあるに違いない。

舞輝はレッスンに入ると、悩みなんてどっかいってしまうくらいの集中力がある。
そして、翔も聡太も惚れ惚れする舞輝の踊り。
かつては二人とも、舞輝に惚れていた。
振られたけど、そのおかげで友達以上のキズナもある。

ガラス張りのスタジオでは、レッスンを終えた研究生が舞輝の踊りを見て惚れ惚れしている。
トゥ・シューズのレッスンを入れて2時間のレッスンをこなした。

「今日はこれまでにします。」
「ありがとうございました！」

「暑い！」

汗だくで聡太が床に倒れこんだ。

「もう、そんなんで寝転がんないでよ。聡太がダスキンかけてよ。」
「マジかよ？勘弁。」
「ダメよ。はい。」

舞輝は聡太にダスキンモップを渡すと、座ってシューズを脱いだ。

「くさぁっ！」
「嗅ぐなよ！」

翔が大笑いしてる。

「おまえら手伝えよ！」
「あはは！嫌だよ。」
「聡太頑張れ！」

聡太のモップがけが終わると、次のレッスン着に着替えて食堂に行った。

「あぁお腹すいた！」

舞輝のお皿はすでにてんこ盛りに盛られている。

「バレエの後は異常に腹減るんだよな！」
「そうそう。」
「やっぱわかんね。」
「いい加減慣れて？」
「何年いても、理解できねぇよ。お前らの食欲には。」

ホントに。
よくそんなんでリフトができたもんだ。

「いただきまーす！！！！！」
「気になって仕方ないんだけど。」
「何が？」
「さっき、聞いて欲しいことがあるって。」
「あぁ！そうなの！教えってやってみない？」
「教え？舞輝のスタジオでか？」
「うん。ワークショップ的な感じで。例えば、翔ならアダジオとか。」
「うん、喜んで引き受けるよ。」
「ほんと？達弥さんも喜ぶ。聡太にも是非。」
「俺はなにもできないよ。二人みたいにうまくない。」
「そんなことないよ。あたしや翔にもってないもん聡太にはあるよ。」
「俺もそう思う。」
「やっぱ聡太はモダンがいい！」
「そうだな！聡太の表現力は劇団１だ。」
「そうか？でも、モダンやコンテンポラリーは教えられる。」
「決まり！予定合わせて、受講者集めてやってみようよ！ホームページで非会員の人もＯＫにして載せて。」
「インストラクターか・・・一度やってみたかった。」
「よかった話してみて。」

一息つくかのように舞輝は黙った。

「なぁ、舞輝、他にもあんだろ？話しが。」

翔が言った。

「うん・・・・。実はさ・・・達弥さんが前に付き合ってたっていう女の人と昨日再会したらしくて。１３年ぶりに会ったのもなんかの縁だから相談のって欲しいって言われたらしいの。」

「うんうん、断ったんだろ？」

「それが、ＯＫしたみたいで。」

「んぐっ」翔が食べていたナポリタンを噴き出した。

「マジかよ・・・なんで。」

「ほっとけなかったみたい。」

「ほっとけなかったって？」

「単に優しいからよ。あたしが気になってるのは、相手のほう。」

「元カノ？」

「うん。より戻したいんじゃないかな。」

「なるほどな。」

「達弥さん断れよっ」

聡太が苛立っている。

「ごめん、聡太。へんな話ししちゃって。」

「違うよ。舞輝が悪いんじゃない。達弥さんの優しさにもほどがある。」

「うん・・・多分、達弥さんもわかってるんだと思う。だから話し

てくれたんじゃないかな。」
「どうすんだよ、達弥さんだって男だからな、良くない方向に行く可能性あんぞ？」
「信じるほかないでしょ。あたしもさ、怒ればよかったのかもしれないけど、力になってあげれば？なんて言っちゃって。」
「舞輝も人がいいにもほどがあんぞ。」
「あたしもそう思った。だから相談してるんじゃない。」

翔と聡太はため息ついた。

「それっきりで終われればいいけど。」

舞輝もため息。

「あまりにも怪しかったら、ケータイチェックとかしたほうがいいかもな。」
「ん～。そだね。様子見てみる。」
「そうするしかないもんな。いまんとこ。」
「だな。さ、飯の続き。」
「聡太ごめんね。箸止めさせて。」
「気にすんな」
「なんで俺には言わないんだよ？」
「翔のは着実にお皿が綺麗になっていってますけど？」
「俺だって心配してんだぞ！！」
「わかってる、ごめんね。」
「気にすんな。」
「それが言いたかっただけじゃ・・・」
「まぁな。」

翔はおかわりに席を立った。

「ホントに平気か？なんかあったら言えよ。」
「聡太ありがと。」

午後のレッスンを終え、舞輝は翔たちと別れて舞弥の幼稚園に向かった。

「お世話様でした。」
「ママァ～！！！！」

舞輝をみつけると、舞弥は教室の端からもうダッシュで走ってきて舞輝に飛びついた。

「おもっ・・・」
「今日、お遊戯でダンスやったんですよ。舞弥ちゃんはホントに上手ですね！」
「舞弥上手だったって。よかったねぇ！」
「うん！」
「覚えるのが早いんですよ。その後、自由時間に鏡に向かって一生懸命踊ってました。」
「お遊戯をですか？」
「いいえ、ＨＩＰ－ＨＯＰっていうんですか？かっこいいダンスでした。」

舞輝は目をパチクリさせた。

「・・・そうですか。舞弥、なにやってんの。」
「こないだパパに教えてもらったの練習してたの。」

「練習熱心ですねぇ！しょっちゅうですよ。」
舞輝は苦笑いのまま会釈して教室をでた。
劇団なんとかみたいなとこに入れようか。
舞輝は真剣に考えてみることにした。
幼稚園をでてスタジオに到着すると、
「今レッスン中？」
「ううん、ちょうど終わった頃だよ。」
「わ～い！」
舞弥は車から飛び出して幼稚園バックを揺らして真っ先にスタジオの中に入っていった。
「パパぁ～！！ただいま！」
「おかえり！」
舞弥は達弥にも飛びついた。
必ず新しく入った生徒さんにびっくりされる。
「こんなおおきなお子さんいるんですか？？」
って。
見た目が若いせいで、よく言われる。
母親が舞輝だと知るともっと驚かれる。
「お疲れ様。」
「おかえり。」

「翔も聡太もワークショップＯＫもらった！」
「ほんとか？さすが舞輝。」
「パパ、続き教えて！」
「いいよ。ママのレッスンが始まるまでだぞ？」
「うん！ママのレッスンもでるもん。」
「そっか。じゃぁ、ママと支度しておいで。パパはダスキンかけるから。」
「はい！ママいこぉ！」

舞弥を着替えさせると、勢いよく更衣室を出て行った。
ホントに踊るのが好きなのである。
舞輝も着替えて更衣室を出た。

受付をしながらストレッチをながら生徒さんを待ちながら今日何やるか考える。

「おはようございます。」

振り返ると、愛海が立っていた。

「愛海！おはよう！受けにきたの？」
「そうよ。何か？」
「めずらし。」
「初めてだもん。舞輝のレッスン受けるの。」
「子供は？」
「実家。疲れちゃったから実家に預けてきた。たまには一人で好きなこともしたいってとこ。ストレス発散もしないとね。」
「そうだよね。」
「舞弥ちゃん、また大きくなったんじゃない？」
「うん。」

「うまくなったねぇ。」

感心している。

「達弥さんの子だよね。ＨＩＰ－ＨＯＰはずば抜けて飲み込みが早い。」

「うん。でも、踊ってる時の顔は舞輝にそっくり。」

愛海は目を細めた。

続々と集まってくる生徒さんたちは舞弥の踊りに釘付けになっていた。

「よし、今日はここまでな。」

「うん、ありがとう！」

「お疲れ様。舞弥、パパと帰らなくていいの？」

「うん！ママのレッスンもやる。」

「そっ、じゃぁ達弥さんお疲れ様でした。」

「夕飯どぉする？」

「そうだな・・・」

舞輝が考えてると愛海が会話に入ってきた。

「今夜借りちゃダメですか？久しぶりに子供置いてゆっくりできそうなんです！あんまり遅くならないようにするので！」

「愛海ちゃん！ごめん気づかなかった。」

「ひど・・・」

「ホントごめん、じゃぁ舞輝をよろしく。舞弥いていいのか？たまには女二人でいけば？」

「でも、レッスン受けるって言うし。」

「じゃぁ、帰らないでここにいるよ。終わったら舞弥連れて帰る。」

「いいの？」
「いいよ、行っておいで。」
ホント、優しいんだから。
「ありがと。」
「達弥さん、ありがとうございます！」
「舞弥頑張ってこいよ、見てるからな。」
「うん！」
「では、始めマース！もっと前に出てあげてくださいね！後ろの人バーにぶつかっちゃうから！」
音楽が鳴り出す。
「ストレッチからいきまーす！足開いて頭下げてください。」
舞輝の元気な声がスタジオに響く。
達弥は受付に座って今日のレッスン代の集計を始めた。
すると、ケータイが”ブー　ブー　ブー”とバイブが鳴ってるのに気づいた。
陽子からのメールだった。
【少し話せないかしら？】
達弥は、外に出ると陽子に電話をかけた。
「もしもし・・・」
「もしもし。どうした？」
「ごめんなさい・・・寂しくて。」
「なんかあったのか？」

「今付き合ってる人が・・・付き合ってるんだかないんだかわからないけど、帰ってこないの。」
「いつから？」
「先週から。どうしたらいいかわかんなくて。」
「そうか・・・ごめんなんにもしてやれないな。」
「いいの。こうして話し相手になってくれれば。ありがと。」
「明日はどうだ？話し聞くよ。」
「うん。大丈夫。」
「じゃぁ、明日。」
「えぇ。」

達弥は電話を切った。
噂には聞いていた。陽子は男ったらしで、かまってもらえないとすぐに別の男を作って捨てる女だと。
寂しくなって他の男と遊ぶ。その男のが新鮮で楽しいから乗り換える。
きっと、自分のときもそうだろうと思っていた。
別の男ができてそっちに行きたかったのだろう。
気づかない振りして陽子との思い出を楽しかったままにしたかった。
でも、自分がほったらかしにしたからそういう女になってしまたのかもしれない。
少なくとも自分にも原因があると思っている。

「達弥さん？」

振り返ると、舞輝が立っていた。
聞かれたか？
少し焦った。

「舞輝、どした？」

「水分休憩と靴。」
「そっか。」
「電話？」
「うん。友達から。」
「そう、いないからどおしちゃったのかと思った。」
「今戻るよ。」
「うん。」

いつもなら気に留めない舞輝が今日は外にまで出てきた。
きっと気にしているのだろう。
舞輝は達弥のプライベートに口を突っ込まない。
電話してても、飲んで帰ると言っても、気にかけない。
ホントは誰とどこで飲んでるのか気になってるに違いないのだけど。
それは舞輝なりに達弥を信じているから。

陽子のことで、舞輝の口から”信じてるから”と出たことはイコール不安。
達弥はため息をついた。

中に戻って、レッスンを見ながら事務作業。
ふと、舞輝を見た。
この姿に惚れた。
舞輝の楽しそうに踊る姿。おいしそうに食べる姿。
もし舞輝が自分のものになったら、こいつだけは絶対離さないと心に誓った。
なのに・・・離すつもりはなくても、陽子の存在は無視できない。

どうしたらいい・・・

事務作業が済む頃、舞輝のレッスンも終わった。

「お疲れ様。」

生徒さんに声をかけながら、ダスキン片手にフロアーに出た。

「達弥さん、あたしやるから！」

「いいよ、早く着替えてこい。シャワーも浴びないと、これからでかけるんだろ？」

「そうだけど。」

「俺はそんなに疲れてないから。舞弥と片付けしてからご飯食べて帰るからさ。気にしないでゆっくりしてこいよ。」

後ろめたいのか、舞輝に気をかけてしまう。

「じゃぁ、遠慮なく。」

「舞弥、着替えておいで。」

「はーい！」

舞輝は達弥の言葉に甘えてそうすることにした。

「ねぇ、どこ行く？」

愛海は大はしゃぎ。

「ご飯食べてお茶して、ドライブでもする？」

「女同士で？」

「うん。」

「味気ない？」

「とっても。でもいっか♪」

着替えてスタジオに行くと、舞弥と達弥が一緒になって鏡の拭き上げをしていた。

「ありがと、行ってくるね！」
「あぁ、愛海ちゃん、舞輝よろしく！」
「お借りしまーす！舞弥ちゃん、またね。」
「うん、ばいばい！」

二人はスタジオを出て、車に乗り込んだ。

第3話

「達弥さん、優しいね。」
「うん。」
「幸せ者だ。」
「うん。」

そう、達弥さんは優しすぎる。
突然現れた元カノの陽子に達弥さんの優しさの意味を履き違えられないだろうか？
多分、達弥さんはほっとけないから陽子が何度も呼び出せば達弥は出向いてしまうだろう。

「舞輝？」
「ん？」
「ぼーっとしてるから。」
「ごめん。」
「あたし、まだ死にたくないんだけど。」
「神経はきっちり運転に使ってますよ！！」

舞輝の運転する車は近くのイタリアンレストランに入っていった。
窓際の席に案内されると、舞輝はメニューを広げた。

「いらっしゃいませ。本日、良質の国産和牛が入りまして、コースのメインでお出ししております。よろしかったらご賞味ください。」
「肉・・・」

舞輝の目は輝いた。

「じゃぁ、コースにしよっか。」
「うん！」
「ではコース料理でご用意いたします。」
「おねがいしまーす！」
「ワインなどのご用意はよろしいですか？」
「愛海飲んだら？あたしは車あるから。」
「お客様、ノンアルコールのビールを当店ではご用意してございますが。」
「凄い！舞輝、乾杯しようよ！あたし赤ワインを。」
「そうだね、それでお願いします。」
「かしこまりました。」

他にパスタや食後のドリンクをチョイスしてウェイターは一礼して下がった。

「ここのパスタは絶品！」

愛海が言った。

「よくくるの？」
「幼稚園のママさんとね。お茶会があるの。」
「へぇ。」
「入るか入らないかで、態度が全然違うんだから！」
「なにそれ。仕事持ってて入れない人だっているでしょ？」
「うん。はぶられてる。見てて辛い。」
「大変だねぇ。」
「舞弥ちゃんのとこはない？」
「聞かないなぁ。あるのかもしれないけど。愛海のとこは有名私立幼稚園じゃん。だからじゃない？」
「まさかお受験戦争に巻き込まれるとは・・・進学率都内トップ3

だって。」
「知らなかったの？」
「全然。」
「知らないで入る人も珍しい。」
前菜と、ワインとノンアルコールのビールが運ばれてきた。
「では、久しぶりの夜に乾杯！」
「乾杯！」
舞輝はビール大好き。
ビール離れしていく若者が多い中、とりあえずビール組の一人。
ノンアルコールでも一気飲み。
「んー。どうなんだ？飲まないほうがよかったか？」
「マジ？つか早っ。」
「ビールは一日の終わりに飲む自分へのご褒美だからね。」
「いつの間にそんなにおっさんになったの？免許とってたのもだけど。」
「作者が”愛海　篇”書いて、しばらく違う作品書いてる間に。」
「そうなんだ。随分時間かかったんだね。あたしら再登場までに。」
もう、二人ともすっかりママになって、話す内容も子供の話しばかりだった。
愛海の子供はいちを”お受験”をするらしい。
メインの国産和牛が出てくると舞輝は目を輝かして頬張った。
「おいひぃ～！！！！」
「達弥さんに見せてあげたいわ。」

デザートも綺麗に平らげて、二人はドライブがてら愛海の家に向かった。

「いつも、こんな遠くから来てくれてんのね。」
「そうよ。楽しいから気になんないけどね。」
「ありがと。評判は上々だよ！」
「ほんと？嬉しい。」
「これからもよろしくね。」
「出来る限り協力する！」
「そう、翔や聡太をワークショップの講師に招こうと思うの！」
「ほんと！受けてみたい！」
「是非。翔はアダジオだから、バレエ中級者以上しか受けられないけど、聡太のモダンやコンテンポラリーは興味あれば誰でもＯＫ。愛海も好きそうじゃない？」
「うん！コンテンポラリーは一度やってみたかったの。」
「だと思った。日程決まり次第教えるね。」

車は愛海と廉の愛の巣の門の前に止まった。
しっかりセキュリティーも完備されている豪邸。

「ありがと、付き合ってもらっちゃって。」
「いいよ。こちらこそ誘ってくれてありがと。いい気分転換になった。旦那様によろしく。」
「ＯＫ！じゃぁ、おやすみ！気をつけて帰って。」
「うん。おやすみ！」

舞輝は車を走らせた。

「さようなら・・・達弥さん。」
「舞輝？どこいくんだ？」
「今までありがとう・・・一緒にいれて楽しかった。」
「舞輝！待って！」

「待って！」
飛び起きると、舞弥の部屋だった。

またか・・・？

この前見た夢に似ていた。
舞弥を寝かしつけていたら一緒に寝てしまったようだ。
まだ舞輝は帰ってきていない。

舞輝が去っていく夢。
これで2回目だ。
二度あることは三度ある・・・か？

舞輝が言うように三度目は正夢だったりしないか本気で思った。
達弥は、頭をくしゃくしゃとして、舞弥がすやすや眠るベッドから出た。
キッチンに水を飲みに行くと、玄関で鍵の開く音がした。

「ただいまぁ～」

寝てるかもしれないと思ってか小声で舞輝は入ってきた。
達弥はキッチンから顔を出した。

「おかえり。」
「ただいま！今日はありがとね。」
「いいよ、楽しかったか？」
「うん。愛海とご飯なんて久しぶり。」
「そっか。」

舞輝は寝室に行って荷物を置いて部屋着に着替えてカバンを開けた。

「舞輝、もう寝るか？」
「うん、顔だけ洗って寝ようかと思ってるけど。」

カバンの中から洗濯物を出していると、後ろから達弥に抱きしめられた。

「達弥さん？」
「疲れてる？」

疲れていないわけがない。
でも、これは二人の”合言葉”。

「やっぱり、シャワー浴びてこようかな。」
「うん。」

舞輝は洗濯物と新しい下着を持ってお風呂場へ行った。

あんな夢を見たせいで、舞輝が急に恋しくなった。
舞輝の温もりが欲しい。
夢で見た不安をかき消したかった。

ベッドで横になってテレビを見ていると、舞輝がシャワーから戻ってきた。

「おい、風邪ひくぞ。」
「だって、手っ取り早いかなって思って。」

舞輝はタオル一枚だった。

「脱がす楽しみあった？」
「特にない。」
「ならいいじゃん。」

舞輝はベッドに腰掛けた。

「きっと達弥さんがあったためてくれるって思ったから。」

達弥は舞輝の頬を触った。

「舞輝。」
「ん？」
「愛してる。」

突然の告白に舞輝は目をパチクリさせた。

「どしたの？急に改まって。」
「改めて舞輝が好きだって思ったから言ったんだけど。」
「あたしは、改めなくても達弥さんのこと大好きだし、愛してるけど？達弥さんに恋したときからなんにも変わっていない。」
「そうだね。俺ちょっと変だな。」

舞輝は首を横に振った。

「たまに言われると嬉しいかも。」

「ホント？」

「うん。達弥さん、愛してる。」

「俺も。」

唇を重ねると、そのまま二人は布団に入った。

大理石のお風呂からでてバスローブ羽織って愛海が出てきて、廉が座るソファに一緒に腰を沈めた。

「ねぇ？廉くん」

「何？」

「最近達弥さんどぉ？」

「達弥？なんで？」

「舞輝がちょっと変。」

愛海とは中学のときからの親友。舞輝の様子を見ればすぐにわかる。一方、廉も達弥の相談相手。なんかあれば廉に相談してくる。

「気のせいなんじゃないか？」

「そうかなぁ？？」

「まだ俺に話してないだけかもしれないけどな。」

「まぁねぇ。」

廉は愛海の頭に手をポンっと乗っけた。

「舞輝ちゃんのことになるとすぐそうなんだから。」

「だって・・・」

愛海は少しうつむいた。

「わかるよ。愛海は悩みないのか？自分のことそっちのけにしなきゃいいよ。」

「今は、ヨガのインストラクターとして気道に乗ってきてる。廉くんや子供たちに不満はない。」

「そっか。達弥からなんか話しあったらすぐに教えるよ。」

「うん。なんか嫌な予感がするの。」

「大丈夫だよ。何度も乗り越えてきてるじゃないか。」

「そうだね。」

廉は肩を落とす愛海を引き寄せた。

舞輝はケータイが鳴っている音で目覚めた。

アラームかと思ってケータイを取ると、メールであった。

何時？

メールのチェックしながら時間を確認してびっくり。

８時！？

飛び起きて、達弥を起こそうと横を見ると達弥の姿がなかった。

寝室を出ると、舞弥を着替えさせ朝ご飯の準備をしていた。

舞輝が起きてきたのに気づき、

「おはよ。」

「ママおはよ〜！」

「お、おはよ。ごめん、寝過ごしちゃった。起こしてくれればよかったのに。」

「いいよ。昨日は疲れてるのに引き止めちゃったから。」

「そんなのお互い様じゃん。」

「たまには手伝いたいんだよ。お互い様だから。顔洗ってこい。」

「うん。」

洗面所に行って、顔洗って戻ると達弥が作った朝ごはんが並んでいた。

普段もキッチンに立つことはあるが、あまりにも豪華すぎていた。

「すごい・・・」

「パパすごいねぇ！おいしそう！」

「そうか？いっぱい食べて幼稚園行けよ。」

「うん、いただきまーす！」

「舞輝も。」

「うん。」

舞輝は席に着くと、「いただきます」と言って達弥の作った朝ご飯を食べた。

「うん、おいしい！」

舞輝は目を輝かせた。

「パパおいしいよ！」

「そうか！よかったぁ。ママには負けるけどな。」
「そうだね。」
「・・・」
舞弥のひょんな一言でがっくしの達弥。
舞弥はもちろん悪気があって言ったわけではない。
それには舞輝も苦笑い。

「まぁまぁ、ホントおいしいし！今日もがんばれる！」
「サンキュー。」

舞弥を幼稚園に送り届け、家に戻ると、達弥と分担して家の掃除。
全てが終わると、今度は各自の車でスタジオへ。

今日は舞輝が一日スタジオにいる。
二人でスタジオの準備をして、達弥は仕事にでかける。

「今日一日頼むね。」
「うん。」
「今日は少し遅くなる。舞弥頼んで平気か？」
「大丈夫だよ！心配しないでいってらっしゃい！」
「わかった、いってくるよ。」

達弥は某スタジオに向かった。
一般オーディションで選出された新人アイドルグループの振り付けと指導。
彼らは達弥がデビューが決まって必死に踊ってた頃と同じ顔をしている。
希望と不安でいっぱいで、一時一時全てが精一杯。

怒鳴ってしまうときもある。でも、出来たら褒めまくる。
もうすぐ、デビュー曲の発表。
何日ぶりかのレッスンだから、今日は怒鳴ることになりそうだ。
ハードなスケジュールをこなしながらダンスレッスンの彼ら。
疲れはピークに違いないが、もう仕上げ段階だった。

そして・・・これが終わったら陽子と会う約束がある。
言ってくればよかっただろうか？
きっと無理してでも舞輝は笑って送り出したに違いない。
それを見るのが辛かった。

「おはようございます！」

新人アイドル達が、スタジオに入ってきた。

「おはよう！疲れてないか？」
「大丈夫です！」
「そうか、軽くストレッチしてから始めるぞ。」
「はい！」

達弥は音楽を流して、曲のカウントに合わせて一通りのストレッチをやる。
始めから踊ったり、派手なストレッチはしない。
徐々に筋を伸ばしていく。
そうしないと怪我のもとになるからだ。

ストレッチが終わると、今度はヒップホップの基礎になるリズムの取り方の練習をする。

「よぉし！じゃぁ、一回音でやってみせてくれ。」

「はい。」

全員が位置につくと、達弥は音を流した。

踊りだす彼らを見て、達弥は固まった。

嘘だろ？

見違えるほど上達しているではないか。

何日か空いたうちに練習をしていたようだ。

前回の稽古で「なめてんのか！」と怒鳴った。

注意点を見事克服している。それどころか、息もぴったし合わせている。

曲が終わると、達弥は拍手をした。

「すごい上達しているじゃないか！！練習したのか？」

「あの日、達弥さんに凄い怒られて、改めて自分たちの立場を考えました。そしたら自然に空いた時間でも、みんなで踊るようになって。」

達弥の目に涙が浮かんだ。

「そっか！よく頑張ったな。」

涙する達弥につられて彼らも涙ぐんでいた。

デビュー前の新人アイドルのダンスの指導をするのは始めてだった。

達弥自身、できるか不安だった。

たんに楽曲を渡され振りを付けて教えるとはわけ違う。
きっとお披露目のときも達弥は感動するのだろう。

レッスンは夕方まで続き、稽古を終えると、達弥は渋谷向かった。
陽子とは１８時に待ち合わせている。

待ち合わせたカフェに入ると陽子は窓際に座って達弥に手を振った。
達弥はカウンターへ行って、カフェ・ラテを注文した。
手早く店員がカフェ・ラテを作ってくれた。
それを持って席に戻ると、陽子はタバコを吸っていた。

「お待たせ。」
「あたしもさっき着たとこよ。」
「お前、その顔どうした？」

口のとこに殴られたような痕があった。

「ちょっと・・・」

陽子はタバコを取り出して火をつけた。

「タバコ吸うのか？」
「うん。」
「体に悪い、止めたほうがいいぞ。」
「そうね。達弥が言うならやめようかしら。ストレス溜まってるのね、なかなか止められない。」
「そうか。彼氏は戻ってこないのか？」
「えぇ。ちっとも。彼には女がたくさんいるの。」
「傷が深くなる前に、終わりにしたほうがいいんじゃないか？」
「そうね・・・。ねぇ奥さんとはどこで知り合ったの？」

陽子は話題を変えた。
もうそれだけ傷はふかいのかもしれないと、達弥は思った。
お互いの近況報告を13年分して、陽子と別れた。
達弥は自宅マンションの駐車場に車を停めると、廉に電話をした。
「達弥か？」
「遅くにすまない。ちょっと話しあって。」
「くると思ってたよ。」
「は？」
「愛海が舞輝ちゃんの異変に気づいて、俺に達弥からなんか聞いてないかって。」
「そっか。さすが愛海ちゃん。」
それだけ舞輝が気にしているのがわかった。
「もしさ、廉の元カノが突然現れたらどうする？」
「簡単だ。俺には元カノはいない。初めての女は愛海だと思ってる。」
「ハハ、なるほど。思っているか。」
「現れたのか。」
「あぁ、話したことあったか？デビュー前にフラれた女の話し。」
「聞いた。達弥がすげぇ惚れてた女だろ？」
「こないだ偶然再会してさ。相談あるって言われて・・・ほっとけなくて、さっきまで会ってたんだ。」
「お前まさか・・・」
「廉の心配するようなことはしてないよ。たださ・・・会ったこと舞輝に言うべきか言わぬべきか迷ってて。」
「知ってるんだな？再会したことは。だから愛海が舞輝ちゃんの異

変に気づいたんだ。」
「だろうな。再会したことは話した。いつか会う話しも。舞輝は力になってあげたらって。」
「なんで断らなかった。」
「俺にもわかんないよ。ほっとけなかったんだ。」
廉が苛立っているのが感じてとれた。
「悪い、こんな話し。」
「いや、こっちこそすまない。俺だって実際どうなるかなんてわかんないもんな。」
廉は自分に置き換えても愛海を選ぶ自信があった。
でも、実際と置き換えるではまったく違ったりする。
「舞輝ちゃんは、お前を信じて言ったんだ。ホントはそれが一番無理していることなのかもしれないな。だから裏切っちゃいけないと思う。ちゃんと報告しよろ。」
「そうだな・・・そうするよ。」
達弥は電話を切ると、車を出て部屋に向かった。
「ただいま。」
「おかえりー」
居間から舞輝の声がした。
「遅くなってごめんな。」
「ううん。昨日はあたしが自由な時間過ごしてきたんだし。達弥さんだって息抜きが必要でしょ？お風呂入ってきちゃえば？」

「そうするよ。でも、その前に話しとくことあるんだ。」
「なに？」
「舞輝が俺を信じてくれてるから裏切れない。」
「どうしたの？」
「さっき・・・こないだ話した陽子と会ってた。カフェで13年分の近況報告して帰ってきた。」
「そっか！」

舞輝はそう言ったままテレビの続きを見だした。
その姿が気にしないフリしているように感じた。
達弥は舞輝を抱きしめた。

「もう、会わないから。心配かけてごめん。」
「言ったでしょ？信じてるって。話してくれてありがとう。」

ホントに、会わない？
そんなこと言い切れる？

声に出して言いたい。
達弥も望んでいるかもしれない。
でも、言えなかった。

達弥にお風呂に入るように促して舞輝はソファに座ったまま深くため息をついた。

舞輝の予想は的中していたようだった。
あの日以来、陽子からのメールや着信が頻繁に来るようになった。
会ってほしいとか、話し聞いてほしいとか。

それでも、舞輝は黙って気を利かせて席をはずしたりしていた。
舞弥といることで気を紛らわせてたのも事実だった。
我慢に我慢を重ねてきたある日、とうとう泣いて電話をしてきた。
「泣いてるのか？」
達弥の顔色が変わったのに舞輝も気づいた。
「泣いてちゃわかんないだろ？」
舞輝は舞弥とリビングを出て子供部屋に行った。
「パパどうしたんだろうね？」
「大事なお話があんの。さぁ、寝よう！」
目をこすってる舞弥を見てホッとする舞輝であった。
寝かしつけるのに３０分はかかったはずだが、リビングに戻ると達弥の姿はなく、ベランダから聞こえる話し声でまだ陽子と話しているのがわかった。
舞輝だって女。
不安や嫉妬くらいする。どんなに達弥を信じていても。
ようやく電話を切った達弥が部屋に戻ってきた。
「ごめんな、舞輝。」
「全然！大丈夫なの？陽子さん」
なんとなく大丈夫じゃないことは感じていた。

「あんまり・・・大丈夫じゃないんだ・・・。」
「そう・・・」
「あのさ・・・」

言いたいことはわかっていた。

「行ってあげて。」
「舞輝・・」
「ほっとけないんでしょ？あたしは大丈夫。達弥さんのこと信じてるから。」

声が震えていた。
不安と嫉妬と信じたい気持ちがごっちゃ混ぜになっていた。

「行って？」
「舞輝。」

達弥は舞輝を抱きしめた。

「すぐ帰るから。」
「うん。」

達弥は簡単に身支度をして家を出た。

そして・・・

その夜、達弥は帰ってこなかった。

舞輝はソファーに座ったまま、夜が明けてしまったのを知った。

立ち上がると、寝室へふらふらと入っていった。

第４話

「もう、出よう。」

達弥の言葉に陽子は黙って頷いた。

２４時間営業のファミレスで朝を迎えた。

陽子の顔には殴られた痕が青紫になっていた。

「ホントにいいのか？警察行かなくて。」

黙ったまま首を横に振る。

「送るよ。」

「帰りたくない。」

「じゃぁ、どこに行くんだよ。」

「行くとこない・・・」

付き合っている男が突然帰ってきて口論になり、別れ話を切り出すとおもいきり殴られた。

散々殴る蹴るを繰り返すと男は家を出て行った。

次はきっと殺される・・・

陽子はカバンだけ持って家を出てきた。

「ホテルの部屋取るから、今日はそこで一日体休めたらどうだ？今日の分は俺が払うから、一日考えて、もう一泊するなり、友達頼るなりしたら。」

「うん。ありがと。」
達弥は陽子の住んでる町から少し離れた場所のビジネスホテルに部屋を取ってあげた。
「俺、帰るから。なんかあったら連絡してくれ。」
「ごめんね・・・達弥。」
達弥は舞輝に電話をした。
何度かけてもでない。
家にかけてもでなかった。
不安が過ぎる。
達弥は急いで家に向かった。
「舞輝！」
静まり返った家。
どうやら舞弥も舞輝もいないようだ。
達弥はまたケータイをとると舞輝にかけた。
舞輝はでることなく、むなしく呼び出し音だけが鳴り続けていた。
いつもどおりスタジオを開けなくてはならない。
いくら今日は夕方からと言っても、やることは山のようにある。
達弥はシャワーを浴びて、家をでた。

「おはよっ！」
「おはぁ！ってなんでこっちからきたんだ？」
翔が首をかしげた。
「それは、寮からきたからよ。」
「そっか！だから俺達と一緒・・って、えぇ？」
「舞輝、お前・・・」
「でてきちゃった。」
舞輝は舌をペロッと出していった。
「舞輝は舌をペロッと出していった、じゃねぇよ！！！どういうことだよ？」
聡太が興奮しているのがわかった。
「なんでって・・・。」
舞輝は昨日のことを話した。
「舞弥ちゃんは？」
「実家に預けてきた。しばらくここにいる。」
「スタジオは？」
「今日から稽古入るから、教えほとんどないの。」
「舞輝なんで・・・」
「もう、我慢できなくなっちゃって。平気な顔してるのが・・・辛くなっちゃった。」
「達弥さん、すぐに迎えにくるぜ。」
「もう、取り次がないように事務に言ってある。家族でも。しばら

くは、無理。」
舞輝は早足で稽古場に向かった。
「あいつ、大丈夫か？」
翔が心配そうに言った。
「あぁ。」

「こんにちわ」
「あら、舞弥ちゃんのお父さん。どうしました？」
「舞弥は？」
「今日からしばらくお休みしますってお母さんからお電話いただいておりますけど？」
達弥は舞輝の実家に電話を入れると、舞弥は舞輝の母親が見ていた。スタジオ閉めたら迎えに行くと言うと、
「達弥さんの仕事が忙しくて、自分も稽古があるからってしばらく預かることになってるから大丈夫よ！」
と言われた。
帰ってこない気か？
「おはようございます。」

生徒さんが続々とやってくる。

「おはようございます！」

いつもどおりに達弥は振舞った。

「舞輝先生の次の舞台どんなお話なんですか？」

「またお姫様だってむくれていました。」

「かわいいのに！お稽古今日からですもんね！早く見たいです。」

そうだった。

今日から稽古だ・・・

何やってんだ・・・俺は。

スタジオを閉めてから舞輝に電話したが、やはり繋がらない。メールの返信もなかった。

家に帰っても、午前中帰ってきたときとなんにも変わらなかった。

舞輝は出て行ったんだ。

稽古に入ってるから、スタジオでも会う機会はほとんどないだろう。

いる場所はわかっていた。

達弥は翌日、カンパニーの受付に行ってみた。

しかし、受付の人から家族でも取り次げないといわれてしまう。

達弥はスタジオに行ってタイムスケジュールを見た。

稽古がない日にこっちにくるはず。

その日を待つことにした。

それまでに舞輝のキモチも落ち着くかもしれない。

数日経ったある日、スタジオを閉めて家に帰ると、外に洗濯物が干してあるのに気づいた。
達弥がスタジオにいる時間に舞輝は家に着替えを取りに帰っていたのだ。
レッスン着もなくなりかけて困っていた。
達弥は舞輝がいないとなんにもできないんだと改めて思い知らされる。
いつも喧嘩しても2日以上家を空けたことなかった。
すぐに達弥が迎えに行って仲直りする。

【帰ってきてるんだな。洗濯ありがとう。ちゃんと謝りたい。帰ってきてくれ。】

外の空気を吸いにエントランスに出ていた舞輝は、達弥からのメールを読んでそっとケータイを閉じた。
どうしたらいい、とか、どうするべきか、とか、考えてもなんにもでてこなかった。
ただボーっと。ビールを飲みながら空を見上げて星を見てる。

「よっ、飲んだくれ。」

舞輝の横に翔が座った。

「一日のご褒美だもん。一本くらい許してよ。」
「食堂に来なかったな。食った？」

舞輝は首を横に振った。

こりゃ重症だな。

翔はタバコを加えて火をつけた。

「あたしにも一本ちょうだい？」

「舞輝。」

「ダメ？」

「ダメじゃないけど。吸ったことあんのか？」

少なくとも翔は見たことなかった。

「ない。」

「かなり落ち込んでるんだな。」

「・・・・」

もらったタバコに火をつけて思い切り吸ってみた。

「げほっ！ゲホッ。」

「どうだ？ストレス発散できたか？」

「・・・できない。」

翔は煙で涙目になっている舞輝を抱き寄せた。

「無理しないで泣けば？」

「借りていいの？」

「安くしとく。」

「サンキュ・・」

あたしは、翔の胸でおもいっきり泣いた。
翔はあたしのことよくわかってる。
すぐ見抜かれちゃう。
こうして黙って泣き止むまで胸貸してくれる。
楽だよ・・・翔や聡太といるほうが。

翌日、舞輝は午前中の稽古を終えて、スタジオに向かった。
散々泣いたら少しすっきりしていた。
スタジオに入ると、達弥のレッスン真っ最中。
舞輝は素早く更衣室に入った。
着替えて、次のレッスンの生徒さんの受付や自分のストレッチ。

「先生やせたぁ？」

なんて声かけられて話していると、達弥のレッスンが終わった。
達弥がこっちに寄ってきたのがわかった。

「お疲れ。」
「お疲れ様。引継ぎしよ？」
「あぁ。」

舞輝と達弥は受付のとこで引継ぎをした。

「了解。お疲れ様！」
「舞輝・・」
「スタジオまかせっきりでごめんね、今日はあたしがやってから帰るから、帰ってゆっくり休んで。」
「いやっ、舞輝っ！」

達弥の言葉は聞かずにレッスンにいってしまった。
達弥はもちろん帰るつもりはなかった。
なんとしても話したかったから。

デスクにあるケータイがブーブーいってるのに気づいた。
陽子からだった。
あの日以来連絡を取っていなかった。

「もしもし？」
「達弥？」
「あぁ、落ち着いたか？」
「おかげさまで。迷惑かけちゃったわね。」
「いいよ。で、今はどうしてる？」
「友達のとこ転々としてる。」
「そっか。」
「それでね、お願いがあるの。実家帰ることにしたの。荷物と一緒に送ってくれなかしら。」
「わかった。俺もそれが一番いいと思うよ。」
「うん。じゃぁ。」
「あぁ。」

これで、陽子にお節介やくのは最後にしよう。
それで、舞輝と舞弥を迎えに行こう。

達弥はスタジオに戻った。
楽しそうに教えをやっている舞輝がいた。
ホントは傷ついてるに違いないのに。いつもどおりに振舞っている。

舞輝のＪＡＺＺのレッスンは全員女子。
達弥は男子更衣室の掃除をすることにした。

特にシャワー室に重点をおく。
終わって更衣室を出ると、ちょうどレッスンが終わったとこだった。

「お疲れ。」
「お疲れ様。」

舞輝は汗を拭きながら、ストレッチを始めた。

「掃除手伝うよ。」
「明日もスタジオ開けなくちゃいけないんだよ？今日くらいゆっくりしたら・・」
「できないよ。」
「・・・・。」

達弥はモップがけを始めた。
舞輝は鏡やバーの吹き上げ。

舞輝はシャワーと着替えと掃除に更衣室に入った。
きっと待ってる。
どうしたもんか？と舞輝は思った。

更衣室から出ると、達弥が鏡の前で踊っていた。
舞輝に気づいて、動きが止まった。

「帰って・・・こないのか？」

舞輝は黙っていた。

「帰ってこいよ。」

舞輝は首を横に振った。

「舞輝・・」

「ごめん・・・」

舞輝は荷物を持ってスタジオを飛び出した。

達弥は後を追った。

「待てよっ。」

達弥は舞輝の手を掴んだ。

「話し聞いてくれないのか？」

「明日、早いの。帰るね。」

「こっちに帰ってこいよ。」

「今は舞台に集中したいの。ごめん。」

舞輝は手を払いのけて車に乗ると、エンジンをかけて発進させた。

立ち尽くす達弥がどんどん小さくなっていく。

ごめん・・・達弥さん

今はまともに顔見て話せないよ。

第5話

「もしもし」
「廉・・・」
「どした？」
「舞輝が出て行ったんだ。」
「なんだって？」

達弥はあの日のことを話した。

「お前どこまで人がいいんだよっ。」
「ほっとけないだろ？男に殴られてガタガタ震わせて泣きながら電話してきたんだぞ。」
「わかってるよ！女には達弥しか頼る人がいなかったんだ。でも、舞輝ちゃんのキモチ考えたことあるのか？
達弥に力になってやれって言って、電話が来るたびに我慢して、何事もないように振舞って、会いに行ったまんま帰ってこなかったら、取り残された舞輝ちゃんどうなんだよ？
限界だったんだろ。」
「廉の言うとおりだよ。どうしたらいいかわかんない。」
「達弥。迎えに行ってやれよ。昔の女実家に送り届けたら。」
「そのつもりだよ。でも、戻ってこなかったら。」
「何弱気になってんだよ。何度も乗り越えてきてるだろ？いろんなことに。今度も大丈夫だよ。舞輝ちゃんもわかってくれる。」
「サンキュ、廉。」
「愛海に話して連絡取らせてみるよ。なんかわかったら連絡する。」
「あぁ。」

電話を切ると、達弥はベッドに倒れこんだ。

「愛海。」
「何？」
「舞輝ちゃんに連絡とってくれないか？」
「どうしたの？急に。」
「達弥から電話あって、舞輝ちゃん出て行ったって。」
「えぇ？」

廉は簡単に達弥から聞いた話しを始めから話した。

「達弥さんのばかっ」
「達弥も辛かったと思う。そんなに責めないでやってくれよ。」
「舞輝がもう少し自分の気持ち言ってたらよかったのかもね。」
「そうだな。舞輝ちゃんは言うことより、我慢を選んだんだ。」
「ちょっと連絡とってみる。寝室行ってるね。」
「頼むよ。」

愛海は寝室へ行くとケータイを取った。

どう切り出そう・・・

すると、偶然にも舞輝から着信が入った。

「も、もしもし？？」
「愛海？今平気かな？」
「うん、もう子供も寝たし。どした？」
「うん、なんとなく。」
「そっか。実はあたしも今舞輝に電話かけようかと思ってたとこだ

ったの。」
「そうなの？何？」
「いや、なんとなく・・・」
「嘘だ。達弥さん経由で廉くんからあたしが家出たこと聞いて電話しようと思ってたんでしょ？」
「うん。じゃぁ、ホントなんだね。」
「うん・・・我慢するの疲れたの。達弥さんに大丈夫って顔するの。」
「少し事情も聞いたの。まさか別れたりしないよね？？単なる喧嘩だよね？」
「別れるなんて考えてないけど、今、達弥さんの気持ちがわかんないだけ。」
「達弥さんが昔の彼女と舞輝で揺らいでるってこと？」
「少なくとも、昔の彼女は達弥さんに本気だと思う。」
「なんでそんなこと思うの？」
「・・・勘。達弥さん優しいから。」
「いいとこでも、欠点でもあるのよね。」
「達弥さんがマジだった人なんだよ。絶対はないんじゃないかな。」
「また舞輝のネガティブが始まった。」
「今度の作品ね、よくある話しなんだけど、愛してた人が戦争に行っていしまって、生きてるのか死んでるのかわからないまま月日が経ち、姫はある王家と政略結婚をした。
愛してたひとを忘れることはできなかったけど、政略結婚とはいえ、姫を大切にしてくれて幸せだった。
ある夜、城で開かれた晩餐会で、昔愛してた人と再会してしまうの。もう会えないと思っていた二人の心はまた燃え始めてしまう。」
「その姫って舞輝？」
「そ。皮肉にも陽子さんの立場を演じるの。」
「陽子っていうんだ。」
「うん。」

「でも、陽子さんは達弥さんを振ったのよね？」
「うん。でも、忘れられなかったとしたら？他の男と付き合っても達弥さん以上の人がいなかったんじゃない？達弥さんだってもしかしたら・・・」
「舞輝。」
「ごめん。」
「陽子さん、同棲相手に暴力振るわれてたんだって。実家に戻ることにしたからそれを送り届けたら舞輝のこと迎えに行くって。関わった以上そこまでやってやんないとね。達弥さんにも責任あるし。それできっぱり連絡は取らないって。」
「達弥さん、きっと自分の口から話したかっただろうね。メール来るけど一切書いてなかった。聞いてもあげなかった。」
「仕方ないよ。不安にさせた達弥さんがいけないんだから。」

愛海は少し話題を変えてみた。

「そんでさ、二人の心が燃え始めてどうなるの？」
「彼にも奥さんがいるの。その人に嫉妬して・・・」
「嫉妬して？」
「ナイフで刺してしまうの。彼が自分を選んでくれなかったから。」

聞くんじゃなかったと、愛海は後悔した。

「半分狂った姫を旦那は、強く抱きしめて姫の背中をナイフで刺した。”私は、お前を心から愛している。決められた結婚などと思ってはいない。
愛おしいと思うから結婚したのだ。”と言って自分の腹をぷすりと刺す。
”お前の罪を一緒に償う。愛してた人と引き離してしまった戦争を起こしたのはこの王家だ。すまない。お前と過ごした月日は幸せだ

った。”
姫はここでホントの愛を教えられるの。そして旦那と共に死んでゆく。」
「なんか切ないね。」
「血を絶やさぬようにするのが王族の役目。でも、姫の旦那はそんなことちっとも思ってなかったの。
ただ、姫を愛していた。」
「陽子さんも目覚めてくれたらいいんだけどね。」
「愛海、ありがとね。あたし思ったより大丈夫だよ。まだ、心の整理がつかないだけ。」
「達弥さんが迎えに行ったら、ちゃんと帰るんだよ?」
「うん。」

電話を切ると、愛海は廉のとこに戻った。

「全部話したよ。きっと大丈夫って達弥さんに伝えて?達弥さんに大丈夫って顔するの疲れちゃったんだって。
達弥さんの気持ちが揺らいでるんじゃないかって不安とか積もるに積もって飛び出したみたい。まっあたしの解釈だけど。」
「ありがと、達弥に伝えとくよ。」
「もう、ホントに別れるとか言い出したらどうしようかと思ったよ。」

愛海はソファに座り込んだ。

「悪いな、愛海にまで神経使わせて。」
「いいの。舞輝のことは別。」

翌日、廉から連絡が来た。
”大丈夫”って言葉が少しだけキモチを楽にさせた。
達弥は陽子に連絡を取って、帰る日取りを決めた。
ほとんど荷物はないということで、２日後出発することになった。

愛海に「うん。」と言ったはいいけど。
正直、実家まで送ってあげる必要はあるのか??
駅までだっていじゃないか?
荷物が多いとか?
陽子はきっと達弥を離したりしない。
何かにつけ電話してくる。
そんなことばかり考えていた。

「舞輝。」

翔に呼ばれて我に返った。

「え?」
「眉間にシワよってるぞ。」
「うそ!」
「ホント!朝からズット眉間にしわ寄せて考え事してる。稽古中もおかしかった。」
「息合わないっていうか・・・な?」
スポーツドリンクを一気に飲み干した聡太。

「おう。」
「ごめん・・・」
みんなに迷惑かけてる??
舞輝が肩を落として言うと、聡太が急に立ち上がった。
「ちょっと来い。」
舞輝の手を掴んで、外に出た。
「どこ行くの?」
「いいから。」
聡太はタクシーを捕まえて、「丘の遊園地」と言った。
「遊園地?」
「そっ、気晴らし。」
タクシーは遊園地に向かった。
丘の遊園地は、ホントに丘にある遊園地。
観覧車やちょっとしたジェットコースターがある小さい遊園地。
「よぉし!乗るぞ!!!」
聡太は舞輝の手をぎゅっと握って歩き出した。
舞輝は思わず笑みをこぼしてしまう。
まさか聡太とデートするなんて思いもしなかった。
聡太の心意気に応えて思いっきり楽しむことにした。

たいして怖くないジェットコースターで「ギャー！！！！」
たいして怖くないお化け屋敷で「いやぁぁぁぁぁ！」
あたりが暗くなった頃、観覧車。
丘の上からみる街はこれまた綺麗。

「ロマンチックだねぇ！！」
「たいしたとこじゃねぇけど、いいだろ？」
「うん。」

観覧車から降りて二人は飲み物を買ってベンチに座った。

「聡太、ありがとね。」
「いいよ。なんか吹っ切れたほうがいいときってあるし。今日の舞輝にはそれを感じたから。」
「よく見てるね。聡太も翔も。」
「当たり前だろ。俺達は舞輝のファンだから。」
「あはっ、そうだったね！」

聡太は舞輝の手を握った。

「聡太？」

聡太は黙ったままだった。
舞輝もなんとなく合わせて黙った。
しばらく沈黙すると、

「無理だよ・・・」

聡太が呟いた。

「え？」
「無理だよ、俺・・・」
聡太は舞輝を抱きしめた。
「聡・・・」
「俺んとここいよ。」
「えぇ？」
「舞輝は笑ってないと舞輝じゃないんだよっ。俺は舞輝を泣かせることしない。ずっとバカやって一緒にいよう？」
「聡太、ちょっと待って。」
「好きだ。」
「聡太。」
「俺は、達弥さんのものになっても舞輝を想ってた。俺には舞輝以外考えらんないんだ。」
「それは、友達としてではないってことよね？」
「そう。舞輝を女として好きだ。」
寄りかかりたいと思った。
聡太の腕の中でこのまま抱きしめられていたいって・・・
「ごめん・・・聡太」
舞輝は聡太から離れた。
「聡太のキモチは嬉しいよ。でもあたしにとって聡太はやっぱ大切な友達だよ。」
「だよな…ごめん」

「ううん、ありがとう聡太。」
ずっと大事な友達だょ。
「帰るか！」
「うん！」

翌日。
聡太は達弥が一人で見てるスタジオへ行った。
達弥は入り口の所にあるプランターの花に水をあげて手入れをしていた。
聡太が近寄ると、達弥が顔をあげた。
「聡太くん。」
達弥はゆっくり立ち上がった。
「珍しいな。どうした？こんなとこまで。」
「昨日、舞輝に好きだって言いました。俺んとこ来いって。」
「え？」
達弥は固まった。
聡太くんも舞輝を好きだったのか。
「翔と舞輝のダンスを見て一目惚れしました。俺は、達弥さんだから舞輝を諦めたんです。でも、今の達弥さんには舞輝を任せられない。

俺が舞輝をもらいます。」

聡太は振り返って歩き出した。

達弥は呆然と立ったまま見送ることしかできなかった。

聡太くんはもう、何年も舞輝を想い続けていたんだな。

俺だから身を引いたか・・・。

スタジオの真ん中で寝転がって考えていた。

翔くんや聡太くんにあるキズナは俺なんかに敵うなんて思ってもいない。

俺が舞輝を想う気持ちも始まったときからなんにも変わっていない。

考えても出てくる答えはひとつだった。

俺は舞輝を愛してる。

第6話

「あたしを・・・選んでくれないのね？アレンはあたしのものよ・・・」

ナイフを取り出すと、セイラはアレンの妻を刺した。
アレンが叫んでいる。妻を抱き起こして何かを叫んでいる。
セイラの耳には入ってなかった。

これであたしのもの・・・

「セイラ！」

夫の声でハッと我に返った。
アレンが泣き叫んでいる。
血まみれで動かなくなった妻を抱きしめていた。
ふと、自分の手にナイフがあることに気づく。
血まみれになったナイフ。

「あ・・・あたしが・・・？」

怖くなってナイフを捨てた。

「なんてことを・・・」

夫のダンはナイフを拾いながら言った。

「あは・・あはははははは」
「セイラ？」

セイラは大声で笑い出した。

「アレンを愛していたの。でも、アレンはあたしを選ばなかった。ダンも辛かったでしょう。決められた結婚なんて。でも、あなたはあたしを大切にしてくれた。愛してもいない女を・・」

セイラの腹に激痛が走った。
そして、力抜けていく。

「ダ・・ン」

ダンはナイフをセイラの腹に刺した。そして力抜けていくセイラを受け止めて座った。

「私は、セイラを愛しているよ。お前の罪を一緒に償おう。」

セイラの腹からナイフを抜くと、自分の腹にナイフを入れた。

「私は決められた結婚だとは思っていない。セイラを愛しているから結婚したんだ。
辛い思いをさせてしまった。すまない・・・彼とセイラを引き離した戦争を起こしたのはこの王族だ。私にも責任はある。」
「ホント・・・に？あたしを・・・愛してる？」
「あぁ。心から愛してる。」
「あたし、アレンと再会するまで愛されてなくとも、大切にしてくれたあなたを愛してました。あたし・・・なんてことを・・・」
「もういい。何も言うな。」
「いや・・・死にたくない。あなたと一緒にいたい・・・」
「いれるさ、私はお前のそばにいる。」

段々弱くなっていくセイラの声。
ダンは最後の力をふり絞ってセイラを抱きしめた。
「愛しているよ・・・」
セイラを抱きしめる手は、力尽きた。

「ＯＫ！」
演出家の声で舞輝と聡太は目を開けた。
周りでは拍手も沸いていた。
「ありがとうございました！」
二人はペコリと頭を下げて顔を見合わせると、ニッと笑ってＶサイン。
二人は演出家や脚本家の集まるテーブルに呼ばれ最終確認。
全てが終わると、３人で食堂に向かった。
「お前らいい感じじゃん。」
「でしょぉ！」
「むかつく。」
翔がむくれた。
「ヤキモチ妬くなよ今更。なぁ？舞輝。」
「そうだよ。」

「こないだも急に二人でどっか行っちゃうし。」
「いいだろ？取って食うわけじゃないんだから。」
「そうだよ。」
「なんだよ、舞輝まで。」
舞輝はニハっと笑うと、翔の腕に手を回した。
「今度翔とデートする。」
「マジか？」
「俺も連れてけ。」
「嫌だよ」
笑いながら食堂に入る3人であった。

「これで終わりか？」
達弥は車の中を確認した。
「えぇ。これで全部。」
陽子が玄関から出てきた。
今、達弥は陽子の実家に来ていた。つまりは、達弥にとっても地元に近い。
午前中に陽子の荷物を積んで、高速に乗ってきた。
「そっか。じゃぁ帰るよ。」
「お茶でも飲んでいけば？また長旅よ。」
「いいよ、スタジオも開けなくちゃ。」

「そう、忙しいのにごめんなさい。」
「いいよ、じゃぁ、元気で。」
元気で？
陽子は不安になった。
「達弥、また連絡していい？」
陽子は「うん。」と言ってくれるのを祈った。しかし、達弥は首を横に振った。
「俺のお節介は今日で終わりだ。」
「なんで・・？」
「舞輝が出て行ったんだ。だから迎えに行く。」
「迷惑かけないから・・・お終いなんていわないで。」
「舞輝は今回のことも迷惑だなんて思ってないと思うよ。ほっとけない俺を知ってるから、舞輝は力になってあげたら？って言ってくれたんだ。」
「じゃぁ、なんで？」
「俺を信じてくれてるから応えなくちゃ。」
嘘でしょ・・・？
奥さんのほうを選ぶっていうの？
「一人にしないで・・・」
「陽子、舞輝は一人で耐えてるよ、今日も寮の狭い部屋で。」
なんであたしを一人にするの？
何がいけないの？

あたしには達弥しかいないの。
涙になって言葉にならなかった。
「じゃぁな。」
達弥は車に乗り込むと、すぐに発進させた。
これで舞輝を迎えにいける。
舞輝とやり直すんだ。
すぐにでも迎えに行きたいとこだったが、スタジオも開けなくちゃならない。
振り付けの仕事も入っていた。
明日の夕方だな。
舞輝にメールをしておいた。
【明日迎えに行く。一緒に帰ろう。】
舞輝はケータイを閉じて机に置いた。
きっと、達弥さんなりに終わらせてきたんだ。
陽子さん大丈夫かな。
なんであたしが陽子さんの心配してんだ？
舞輝は思った。

舞輝はビール片手に外にでた。
ここで飲むビールは格別♪
明日は・・・どんな一日になるんだろ。

「いたいた。」

翔と聡太だった。

「どしたの？あたし探してた？」
「うん。一緒に飲もうかと思って。」

二人してビールを出した。

「飲もう飲もう♪」
「1本しかないけどな。」

「かんぱぁ～い！」

舞輝だけ飲みかけのビールで乾杯した。

「そういえば・・・飲めたっけ？二人とも。」

飲んだところを見たことなかった。

「のめませーん！」
「やだぁ！ホントに？無理しないでよ。」
「よく一人で飲んでるのみかけるからさ。だいたいなんかあるときだ。」

「さすが翔。」
「当たり前。」
「今日はなんかあったのか？」
聡太はもう顔が真っ赤だ。
「ううん。達弥さんが明日迎えに来るって。」
「そっか。」
「よかったな。」
「うん・・・」
「すっきりしないのがここにいる理由なんだな？」
「うん。」
すでに真っ赤な聡太に対して、舞輝のビールは空になってしまった。
「俺の飲めよ。」
聡太が3口くらいしか飲んでないビールを舞輝に渡した。
「サンキュ。きっと、彼女にやくお節介をお終いにしたんだと思う。達弥さんなりに終わらせたんだと思うんだ。でも・・・」
「でも？」
「陽子さん、簡単に納得いくかしら？」
「なんでそう思うんだ？」
「セイラだから。」
「あれは話しの中のことじゃないか。」
「でも、セイラの立場って陽子さんに近いと思うの。仮に達弥さんにまた恋愛感情あったとしたらよ？あたしも女だから。」
舞輝も”女”か。

嫉妬もするし、彼女の気持ちもわかるか。
翔は黙ってしまった。
「舞輝って女だったの？」
聡太が言った。
「は？あたし女だけど。」
「男だと思ってた。」
「何それ！むかつく！」
聡太なりにこの空気を変えたのだろう。
翔も乗ってみることにした。
「しまった・・・つい舞輝の言葉鵜呑みにするとこだったよ。お前男だよ！」
「あたしは女ぁ！」
「だって俺らといれんの男くらいだぜ？」
「何？急に。」
「しけた面してる舞輝は嫌なんだよ。」
「聡太。」
「明日こそは話し聞いてやれよ。」
翔が頭をなでた。
「うん。」
お終いなんてさせない・・・

あの時は達弥が悪いのよ。デビュー前であたしのことほったらかしにしたから。
でも、今の達弥は違う。あたしにフラれて後悔したの。だから再会したとき優しくしてくれた。
達弥はきっとあたしのこと今も想ってくれている。
達弥にはあたしがいないとダメなの。
あたしにも達弥がいないとダメなの。
ただ、奥さんと子供の存在で責任を感じてるだけ。
きっとそう・・・・奥さんがいなくなればいいの。

陽子の姿は、帰ったはずの地元ではなく東京にあった。

第7話

「お疲れ！」
「お疲れぇ～」
「今日のリフトうまくいったな！」
「ねぇ！」

翔と舞輝は満足気にスタジオを後にした。

「舞輝、翔！」

聡太が合流した。

「おつ！」
「今日帰るのか？」
「うん・・・そのつもり。」
「そっか。それがいいよ。」
「そだね。」

3人は外にでて寮のに向かった。
隣にある寮の門に入ると、エントランスのところで達弥が立っていた。

「達弥さん。」

舞輝の声に達弥が気づいた。
長いこと会っていなかったかのように久しぶりだった。

「俺たちは行こう。」

翔が聡太を促して寮に入っていった。

「久しぶり。」

「うん。」

なんと言っていいかわからなかった。

「元気だった？」

「うん。」

お互い黙ってしまった。

ここが・・・奥さんがいるっていうところ？

しらみつぶしに探した達弥の妻の居所。

名前検索、劇団、養成所、そして寮の存在。

それだけでここまでやってきた。

門から中を覗くと、ちょうど舞輝と達弥が見つめあったまま立っていた。

「舞輝・・・」

「ん？」

「帰ろう？」

「そだね。帰ろう。」

達弥の顔が晴やかになった。

陽子は一気に嫉妬の炎が吹き出た。

許さない・・・

陽子の足は前に進んでいた。

持ってきたナイフを掴んで・・・

達弥の目にナイフを持って突き進んでくる陽子が写ったときにはもう遅かった。

「舞輝っ危ない！」

「え？」

舞輝の体に激痛が走った。

力が抜ける中ゆっくり振り返ると陽子が目を充血させて舞輝を睨みつけていた。

「よう・・こさん」

舞輝は倒れこんだ。

「舞輝っ！」

達弥は舞輝に駆け寄って抱き起こした。

翔と聡太や他の団員たちが達弥の声でただ事じゃないと外に出てきた。

「舞輝！」

翔が声をあげて笑っている陽子を取り押さえに行ったのに対して、

聡太は血まみれの舞輝を見て動けなくなっていた。

舞輝が・・・

「聡太、救急車！」

聡太の耳には入ってなかった。

「舞輝、しっかり！」

達弥は舞輝のわき腹を持っていたハンカチで押さえた。

「達弥さん・・・」

「ん？」

「迎えに来てくれたんだよね？」

わかりきっていることをあえて聞いた。

「あぁ。迎えにきた。仲直りしたくて。」

舞輝は微笑んでゆっくり手を出した。

「・・・なかなおり。」

達弥は舞輝の手を強く握った。

「仲直り。だからしっかりしろっ」

「うん・・・」

舞輝はそのまま目を閉じて達弥に寄りかかった。

「舞輝？」

舞輝のほっぺを軽く叩いた。

「目ぇとじるな！・・・舞輝。」

達弥の声に翔も「うそだろ・・・？」と言った。

数分して、救急車とパトカーがやってきて舞輝は搬送され、陽子は警察に連行された。

処置室に運ばれて手当てを受けてる間に、舞輝の家族や愛海・翔、聡太が駆けつけた。

まず舞輝の父親に殴られた。

ただ謝るしかなかった。

「達弥さんのバカっ」

愛海は到着するやいなや泣きながら達弥の胸を叩いた。

廉が静止に入いると、泣き崩れた。

きまずい雰囲気の中、しばらくすると処置室から担当医が出てきた。

「大丈夫です、傷は深いけど命に別状はありません。あとは本人の意識が戻ればもう大丈夫でしょう。」

担当医の言葉に全員がホッとした。

愛海はまた泣き始めた。
「よかったぁぁぁぁぁ。」
「よかったな、愛海。」
廉が優しく愛海の肩を抱いた。

個室に移された舞輝は、3日経っても目を開けることはなかった。
医者は「本人の頑張り次第です。」とだけ言った。
その間、警察の事情聴取もあった。
本当は陽子と関係があったんじゃないか、陽子と二人で企てたんじゃないか、馬鹿げたことばかりあれこれ聞かれて疲れ果てていた。
舞輝の手を握ったまま寝てしまっていた。ノックで目が覚めた。

「どうぞ。」
「こんにちは。」
翔と聡太だった。
「稽古が忙しいのに、すまない。」
達弥は二人に椅子を用意した。
「舞輝はまだ・・・」
「あぁ。医者も本人の頑張り次第だって。」
「そうですか・・・」
翔は肩を落とした。

「別れてください。」

聡太の予想もしない言葉に二人はあっけにとられた。

「聡太、お前・・・」

「何回舞輝を泣かせりゃ気が済むんだよ。しかも・・こんな・・」

「聡太やめろ。」

「聡太くんの言うとおりだな。こんなことになるなんて・・・」

「ふざけんなっ！」

聡太は達弥に掴みかかった。

「聡太やめろっ！」

翔が後ろから止めに入ったが、聡太の背中は本気だった。

「俺たちはな、達弥さんだから身を引けたんだ。舞輝には達弥さんしかいないって思ったから。

なのになんで舞輝だけ見てやんないんだよっ！なんで舞輝を一人ぼっちにするんだよ。」

達弥は黙っていた。

「聡太、落ち着け。」

聡太は翔を振り払うと、病室を出て行った。

「達弥さん、すみません。聡太の気持ちわかってやってください。」

「聡太くんの言うとおりだから。聡太くんは今でも舞輝のこと？」

「みたいですね。俺も最近気づいたんです。達弥さん、俺も聡太と

同じ気持ちです。俺たちの大事な舞輝を泣かせないでください。」
翔は頭を下げると、病室をでた。
大事な舞輝か・・・
「舞輝、お前は幸せものだな。いい友達持って、仲間もって。」
達弥は眠ったままの舞輝に話しかけた。
返事が返ってくるわけがなく、達弥は舞輝の手を握って泣いた。
「たつやさん・・・？」
顔を上げると、舞輝がこっちをみつめていた。
「舞輝」
「なんで泣いてるの？」
かすかすの声で舞輝が話しかけてくる。
「なんでもないよ、よかった。先生呼ばなきゃな。」
「ねぇ、ようこさんは？」
「警察に捕まったよ。俺も一緒になって企てたんじゃないかって疑われて大変だった。」
「酷いねぇ。」
舞輝は笑って言った。
「疑わないのか？」
「達弥さんはそんなことしないよ。ようこさんを選んだら、まずあ

たしのとこに来るって思ってたもん。」
「そんなこと覚悟してたのか？」
「達弥さんが本気で好きだった人だよ？辛いけど、受け入れるつもりだった。」
「舞輝・・・」
「でも、帰ろうってメールくれたから。嬉しかった。」

達弥は舞輝のおでこに自分のおでこを当てた。

「ごめん・・・舞輝。」
「ううん。誰も悪くなんかないよ。ただ、時のいたずらでこうなっただけだよ。早く先生呼んで？」
「そうだった。」

達弥は涙を拭ってナースコールを入れた。

舞輝が目覚めたと連絡入れたら、連日続々とお見舞いにやってきた。
舞台は降板が決まり、代役の子が泣きながら、

「あたしには荷が重いですっっ！」

と訴えてきて舞輝は大笑いしていた。
それを端っこでみているしかできない達弥。
そっと部屋を出て、待合室のソファに座った。

「達弥？」

顔を上げると、廉が立っていた。

「おっ。」

軽く手をあげた。

「部屋にいなくていいのか？」

「劇団の人でいっぱいだよ。」

「そっか。疲れてるな、大丈夫か？」

「あぁ。なぁ廉。」

「ん？」

「廉は愛海ちゃんを幸せにしてるって自信あるか？」

「俺に不満はまったくないってことはないだろうからなぁ。自信なくしたか？」

「舞輝の方がずっとずっと大人で俺じゃ役不足なんじゃないかなって。」

「そんなこと達弥が決めることじゃないよ。」

「そうだけど・・・」

「達弥は幸せか？」

「え？」

「達弥は舞輝ちゃんに幸せにしてもらってるのか？」

当たり前のようで、違和感のある質問だった。

「俺は、幸せだよ。舞輝と舞弥と一緒にいれて。舞輝は笑顔を絶やさない。」

「なら、大丈夫だよ。きっと。」

そうだろうか・・・舞輝は無理してないだろうか？

「達弥さん？」

「え？」

見舞いの客が帰って、静かになった部屋で舞輝はりんごを剥いていた。

「はい。りんご。」
「ありがと。」
「これ食べたら帰って？」
「なんで・・・」
「顔が疲れてる。」

あぁ、心配して言ってるのか。

「大丈夫だよ。」
「でも、ずっと付いててくれてたんでしょ？ゆっくりベッドで寝て。
また明日、時間できたら話し相手になってよ。」
「あぁ、必ず来るから。」

うなずいてりんごをほお張る舞輝は笑顔だった。

第8話

誤解が生んだ異性関係で舞輝が何度も傷ついて、ついには生死かかわる事態にまでなって
これからも舞輝のそばにいようなんて、親父さんやみんなに顔が立たないか。
自分のために身を引いて応援してくれた聡太くんや翔くんまで傷つけた。

一緒にいて償うのも手かもしれない、一番かもしれない。
でも、一緒にいるがために舞輝や舞弥が辛い思いするかもしれない。

俺がいなければ、舞輝はまた新しい恋ができる。
わざわざ俺なんかといなくても、舞輝のこと好きな奴はたくさんいるんだ、素晴らしい出会いがあるかもしれない。

ホントに、それでいいのだろうか・・・
俺はどうしたらいい？

面会時間ぴったりに病院へ行った。
ノックして入ると、

「早いねぇ！ゆっくり寝れた？」

舞輝は笑顔で迎え入れてくれた。
ベッドの横に松葉杖が置いてあった。

「もう、起き上がれるのか？」
「うん、ゆっくりでいいから歩けって。リハビリ」
「そうか。後で屋上にでも行こうか。」
「うん。」

”コンコン”
ノックの後、遠慮がちにドアが開いてく。
達弥は「どうぞ」と言ってドアを開けた。

「お邪魔します。」

舞輝の両親だった。

「どうも。」

深々と頭を下げた。まだ、まともに顔が見れなかった。

「パパ！ママ！やっときてくれた。舞弥は元気？」
「まったく無茶して、大丈夫なのか？」
「うん、もう、松葉杖で歩けるから。」

達弥は外にでた。
売店に飲み物を買いにエレベーターに乗った。
あの場にいれる自信がなかった。
適当に見繕って飲み物を買って部屋に戻ると、部屋から両親が出てきた。

「もう、お帰りになるんですか？」
「あぁ、元気そうだし。達弥くん。」

「はい。」
「こないだは、殴ってすまなかった。舞輝は達弥くんのこと怒っちゃいないようだ。だが、一度二人でこれからのこと考えたほうがいい。
二人のことに口出すつもりはないが、一歩間違えれば命にかかわってたんだぞ。」
「はい。」
「また来る。今度は舞弥を連れてこよう。」
「舞弥をお願いします。」

達弥は頭を下げた。
部屋に入ると、舞輝は父親が持ってきたCDラジカセを聞いていた。
達弥に気づくと、イヤホンをはずして、

「どこ行ってたの？」
「飲み物買いに。すぐ帰ると思わなくて。」
「ごめんね。ねぇ、早く屋上行こうよ。」
「あぁ。」

達弥は松葉杖で痛そうに歩く舞輝を支えながら屋上に行った。
痛い痛い言いながらもしっかりした足取りである。

「いい眺め！外の空気はやっぱいいね。」

舞輝の長い髪がなびく。
あれから全然歳とったように思えない肌のつや。
子供を生んだように思えないスタイル。
毎日好きになっていく自分がいた。それは１０年経った今も変わら

ない。
舞輝は前向きになった。
人を好きになることに臆病になり、自分が傷つかないように始めっから一人でいることを望んだ。
今の舞輝は、仲間に慕われ、愛されている。
俺がいなくても・・・大丈夫だ。

「達弥さん？」
「ん？」
「どうしたの？」
「いや・・・」

舞輝は達弥のほっぺたを両手でつねった。

「言って！何考えてるの？」
「敵わないな。」
「達弥さんの奥様だもん。」

少し間をおいて、柵に寄りかかった。

「あのさ・・・」

舞輝が首をかしげている。

気持ちが揺らぐ・・・

達弥は目を閉じた。

「別れようか・・・」

目を開けても舞輝の顔は見れなかった。

少し沈黙があった。

「達弥さんが、そう決めたなら・・・」

嫌とは言わないだろうと思っていた。でも、現実に突きつけられた

舞輝の言葉に動揺した。

舞輝を見ると、もう背を向けていた。

松葉杖を頼りにしながらエレベーターに向かっている。

段差につまずいて舞輝は倒れた。

「舞輝っ」

舞輝を起こして顔を見ると、涙が流れていた。

「舞輝・・・」

舞輝は無理して笑顔を作った。

「お別れだね・・・」

「舞輝・・・」

「今までありがと・・・楽しかった。」

舞輝は自力で立ち上がると、エレベーターの方にまた歩き出した。

どっかで・・・

夢だ・・・随分前に見た夢。

「舞輝。」

舞輝を後ろから抱きしめた。

「ごめん・・・俺、舞輝のこと泣かせてばっかだ。舞輝のこと幸せにしてやりたいのに・・・」

「あたしのために考えて出した結論なんでしょ？それで達弥さんが幸せならあたし大丈夫。」

「俺が？」

「達弥さんの幸せがあたしの幸せかな。」

舞輝と離れることが、幸せなわけないだろ・・・

「あたしは大丈夫だから。陽子さんとのことも覚悟できてた。笑って送り出すつもりだったよ。

達弥さんの大好きな人だったんだもん、後になって湧き出てくることだってある。ホントの幸せがそこにあるなら・・・喜んで引くつもりだった。」

翔くんと聡太くんを思い出していた。

俺だから身を引いたと言っていた。舞輝が愛した人だから、舞輝の幸せはそこにある。笑ってる舞輝が二人の幸せ。

そしてようやく気づいた・・・舞輝の”大丈夫”は大丈夫の”振り”。

始めからわかってたはずなに・・・

陽子に会いに行くときに、「あたしは大丈夫だから、行って。」と

言った舞輝の言葉は嘘じゃないだろう。
でも、舞輝は自分の気持ちを抑えて大丈夫な振りしていたんだ。
出て行ったのは、大丈夫な振りをしているのに限界がきてしまったからだ。
理性を失う前に、舞輝なりにとった家族を想う行動。

「ホントは大丈夫じゃないんだろ？一人で頑張るなよ。舞輝のホントの気持ち言ってくれよっ。俺の幸せは舞輝なんだよ。離したくなんかねぇよ。」

舞輝の頬に涙がつたった。

「嘘・・・ついちゃった。陽子さんとこいっちゃう覚悟できてたなんて嘘。大丈夫なんてのも嘘。あたしは、達弥さんとずっと、ずっとずっとずーっと一緒に居たい。」
「俺もだよ、舞輝。舞輝と舞弥が俺の幸せだ。」
「うん。よかった。」

数週間後・・・

「退院おめでとう！！」

愛海がクラッカーを鳴らした。
愛海が取り仕切って舞輝の自宅で退院パーティーが行われた。

「さぁ、乾杯しよう！」

廉の呼びかけでみんな手にそれぞれの飲み物を持った。

「舞輝ちゃんの退院を祝って、乾杯！」

廉はビールを高くあげた。

「かんぱーい！！！！」

一斉に飲み物に口をつける。

ほとんどが一口でやめて舞輝のとこにかけつけたいところだが、肝心の舞輝はビールを一気飲み中。

「んまぃっ！」

久しぶりのビールに身も心も喜んでいる。

「病み上がりなんだから、控えめにな。」

達弥の声はおそらく届いてないだろう。言ってるそばからおかわりをついでもらっている。

舞弥はというと、愛海の子供とお菓子をつまみながら仲良く和室で遊んでいる。

「舞輝、無事退院できてよかったな！」

翔と聡太がコーラを持って寄ってきた。

「心配かけてごめんね。乾杯しよ！」

「かんぱーい！！」

乾杯すると、達弥が「廉のとこ行って来る」と言って舞輝のそばを離れた。
聡太は舞輝の横に行って、

「舞輝。ちょっといいか。」
「何？」
「おれ、料理とって来るよ。」

気を利かせたのか翔は自分からその場を離れた。

「俺さ、達弥さんに舞輝と別れてくれって言ったんだ。舞輝のこと泣かせるなって。・・・ごめん。」
「ううん。達弥さんはきっと受け止めてると思うよ。聡太が言わなかったら自分見失ってたかもしれないし。ありがと。」
「翔もそばにいてさ。カーッとなって達弥さんに言ったあと、寮で翔に怒られた。」
「そうなの？」
「何考えてんだって・・・」

寮に戻って、部屋に入ると翔は聡太の肩を掴んだ。

「おぃ、何考えてんだよ。」
「何が？」
「達弥さんに舞輝と別れろって。本気か？」
「本気だよ。」
「ふざけんなっ。」

翔は聡太の胸ぐらを掴んで壁に押し当てた。
聡太もカッとなって翔につかみかかった。

「ふざけてねぇよ。お前だってみたくないだろ、舞輝のあんな姿。」
「当たり前だ！だけどな、お前が決めることじゃないんだよ。舞輝と達弥さんで決めることなんだ。
ホントに別れたらどうすんだよっ。」
「俺が幸せにするよ。俺は舞輝を泣かせたりしない。」
「簡単なことじゃねぇんだぞ？舞輝には舞弥ちゃんだっているんだ。お前に舞弥ちゃんの分まで責任もてんのか？」
「やってみなきゃわかんねぇよ。」
「だろ？でも、責任もって父親できんのは達弥さんしかいないんだよ。舞輝と達弥さんだけの問題じゃないんだ。」

聡太は掴んだ手を緩めた。

「もし、舞輝が達弥さんと別れる方を選んだときは力になってやれよ。」
「翔、ごめん・・・」
「そん時はキューピッドでもなんでもやってやるからさ。」
「サンキュ・・」

「そっか・・・ごめんね、あたしたちのために喧嘩させちゃったんだね。」
「いいんだよ。翔がキレてくれなかったら突っ走ってた。舞輝を幸せにできんのは俺しかいないって。」
舞輝は背伸びをして大きい聡太に抱きついた。

「聡太、ありがとね。一番ってたくさんいるんだけど、聡太もあたしの一番の親友。大好き。」
「ありがと。俺も大好きだ。」
聡太も舞輝を抱きしめた。
「あぁぁぁぁぁぁっ！」
両手にこんもり料理が盛られた皿を持った翔の叫び声で舞輝と聡太はパッと離れた。
「なに？でっかい声あげて。」
「何抱きついてんだよ！お前の舞輝じゃないだろ？”俺たち”の舞輝だ！」
「悔しかったら、仲間に入れよ。」
聡太が手招きした。
「皿持っててできねぇんだよぅ！」
「じゃ、あきらめろ。」
「持っててあげようか？」
後ろから声がした。
翔は後ろを振り返ると、達弥が立っていた。
「そんな・・・滅相もない！」
聡太と舞輝は失笑している。

「笑うな！ほら、舞輝の分だよ。」
「ありがと。」
舞輝はソファに座って、翔と料理を食べ始めた。
「聡太くん。」
「はい。」
「こないだは、ありがと。」
「いえ、こちらこそ生意気なこと言ってホントにすみませんでした。」
聡太は深く頭を下げた。
「聡太くんのおかげで目が覚めたんだ。直後の俺は、舞輝と別れるとか舞輝の幸せだとか考えてなかった。
聡太くんが言った言葉で俺がしてきたことがどんだけ周りを苦しめてきたのかようやくわかったんだ。情けないよな。
それからの俺は、舞輝にとってどうするのが一番いいか考えた。
別れて聡太くんに任せてもいいって思った。聡太くんも翔くんも舞輝のことホントに大事にしてくれてるから。」
「達弥さん・・・」
「でも、廉に言われたんだ。お前はどうなんだ？って。一緒にいたいならそれでいいって。でも、俺は別れる方を選んだ。そしたら舞輝は「達弥さんがそれで幸せなら」って言った。ちょっとは期待してたんだ。嫌だって言ってくれることを。
でも、舞輝はやっぱりＯＫした。」
「俺のせいで、そんなことに・・・」
「聡太くんのせいじゃないよ。舞輝とまた向き合うことができた。
舞輝もホントのこと言ってくれたし、俺も変わらなきゃ。感謝して

る。これからも舞輝をよろしくな。」
「はい。」
「デートしたいときはいつでも連れ出してくれていいよ。その代わり、」
達弥は聡太の耳元に近づいて、
「舞輝をその気にさせたり、寝取るなよ。」
「達弥さんっ！」
聡太は顔を真っ赤にして言った。
「どうしたの？そんなに仲よかったっけ？？」
フォークをくわえた舞輝が首をかしげた。
「まぁまぁ、男同士愛し合うこともあるんだよ。」
翔は口いっぱいにナポリタンをほおばりながら言った。
「そうなんだ。」
「お前ら食いすぎだぞ。」
「食う子は育つ！」
舞輝と翔は同時に言った。
「最強だ・・・お前ら。」
「サンキュー」
達弥が吹き出した。

「ほんとに最強だ、３人は。」

３人は顔を見合わせて笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9239c/

いつもきみのそばに・・・３

2010年11月2日03時07分発行